

日本語における不完全な述語

——情報内容の言語化について——

尹 盛熙*

Incomplete Predicates in Japanese :

Toward an Explanation for Information and its Linguistic Encoding

Sunghee YOUN

要旨：本稿の目的は、日本語の述語に観察される「不完全さ」を分析の対象として、情報内容の言語化における優先順位について考えることである。行為や状態など、何らかの事象の内容は述語を通して言語化するのが典型的であるが、日本語の述語では一部または全部が省かれることで述語が形態・統語的に不完全な形になるという現象が起きる。その不完全さの傾向には、情報内容を言語化する上で何を省いて何を残すかに関する優先順位が反映されることになり、媒体の異なるテキストにおいても違いが見られる。同一テキストの異なる翻訳形態である字幕と吹替えの場合、不完全な述語が頻繁に用いられるが、その具体的な様相は異なる。音声媒体である吹替えでは文字媒体の字幕に比べて不完全な述語の使用が減るが、コンピュータの省略は増える傾向が見られ、事象に関わる具体的な情報内容がより保持されやすいことが伺える。

Abstract :

This paper aims to investigate the relation between information and its linguistic encoding by observing incomplete predicates in Japanese translated subtitle and dubbed dialogue used in TV shows. These texts, which are in different modes of speech but share an original text, share a tendency toward morphologically or syntactically incomplete predicates by truncating them or eliminating the whole. Between the two texts, however, examples of incomplete predicates exhibit differences in detail. The difference in degree of incompleteness can be considered a manifestation of a distinct priority in linguistic encoding, which functions as a criterion to decide which pieces of information are explicitly expressed. In general, function words in predicates are omitted more frequently in written language than in spoken. Between the two types of text, dubbed dialogue shows a tendency toward having fewer incomplete predicates overall, while eliminating more copulas in nominal predicates than do the corresponding subtitles. This observation implies that, in spoken language, information about the referential content of an event — typically encoded by a predicate — has a higher priority in linguistic encoding than in written.

キーワード：不完全な述語、省略、情報内容の言語化

*関西学院大学国際学部教授

1. はじめに

本稿の目的は、日本語の述語に観察される「不完全さ」を分析の対象として、情報内容の言語化における優先順位について考えることである。行為や状態など、何らかの事象 (event) の内容は述語を通して言語化するのが典型的であるが、日本語の述語では一部または全部が省略することで述語が形態・統語的に不完全な形になるという現象が起きる。その不完全さの傾向には、情報内容を言語化する上で何を省いて何を残すかに関する優先順位が反映されることになる。特に外国ドラマの翻訳字幕 (以下「字幕」) と吹替えテキストでは時間的・空間的な制約から省略の度が高く、不完全な述語の例が頻繁に観察されるが、本稿ではこの2種類のテキストにおける不完全な述語の使用様相を分析し、情報内容の種類と言語化の関連について考える。

まず2章では日本語に見られる文の不完全さの概要とその背景、そして字幕と吹替えというテキストの概要について紹介し、3章で述語に見られる不完全さのパターンについて述べてながら字幕と吹替えデータの比較を行う。その観察結果に基づいて、4章では不完全さのパターンと情報内容の種類を関連付け、情報内容の言語化と日本語における優先順位について考える。5章ではまとめと今後の課題を述べる。

2. 背景について

2.1. 日本語の文と不完全性

ソシュールによると言語は異なる2種類に分けられるとされ、一つは抽象的な知識体系としての言語 (ラング)、もう一つは具体的な状況での使用例としての言語 (パロール) である。日本語で言えば、前者は母語話者が共通してもつとされる日本語の音声、語彙、文法などに関する知識の集合体であり、後者は実際の場面で個人によって行われる日本語での文章や発話の用例に該当する。例えば日本語で会話を交わす際、話し手は頭

の中にある日本語の知識を活用して、置かれた状況に合わせて適切な語彙を選び、文法規則に従って組み立て、聞き手に向かって発することになる。聞き手もまた (話し手のものとおよそ同じとされる) 自身の日本語の知識に照らして相手の発話を解釈することになる。当然ながら抽象的な知識体系の上では間違いのない、理想的な文が想定できて、実際の使用ではそうはいかないため、日常会話などでは規則を逸した表現が数多く見られる。

その一つとしては、文に必要とされる要素が欠けるといふものがある。いわゆる「省略」として知られるこの現象の大よその定義は、抽象的な知識体系を前提に、実際の言語使用で「何かの要素が省かれる」ことを意味するものである。すでに先行文脈で提示されているなど、会話の参加者にとって自明な情報と考えられるものはあえて言語化する手間を省くという、いうなれば「省エネルギー」志向の行動であると考えられる。通常の言語使用では、発話意図に関わる情報内容すべてを言語化することは現実的ではないため、必然的に「言語化されるもの」と「言語化されないもの」が存在する。解釈する側も、言語形式という明示的な手段を通して表現されない情報に関しては、文脈や場面などの背景情報や当該言語の知識・言語外知識などを利用して推測することになる。

これはいうなれば言語形式として顕在化していない意味内容が会話の参加者の間でやりとりされるということから、「意味と形式のミスマッチ」の問題として扱われてきた。特に生成文法の枠組みでは、省略が行われる前の完全な文構造を想定し、そこからの派生を前提として派生の規則と諸言語の類似した現象における異同などを分析することが主流であった。分析対象も先行文脈に提示された繰り返し部分の削除などの現象に集中しており、そのような先行文脈での先提示が想定されないような身近な実例 (新聞見出しなど) に関しては例外扱いとされてきたのである¹⁾。

しかし実際の言語使用ではより多様なケースが

1) Van Craenenbroeck, Jeroen & Temmerman, Tanja (ed.) 2019, *The Oxford Handbook of Ellipsis* (*Oxford Handbooks in Linguistics*), Oxford: Oxford University Press.

存在しており、特に日本語の場合、文の不完全さが観察される例は日常的な表現として定着しているものも多い。

- (1) a. まあまあ、こんなに立派になって。
(大堀 2002)
- b. (外に出ていきなり) ちょっと、マジで寒いんだけど。
- c. 宿題を先に片付けないと。
- d. 今日はもう帰ったら？
- e. きれいな花！(生越 2002)

(1) の例では文が途中で止まっているかのような、続くべき何かを欠いているような印象を与える形になっている。例えば (1a) から (1d) は「～て」「～けど」「～と」「～たら」などで締めくくられているが、これらは日本語では従属節の連結語尾とされるもので、形式的には文が完結していないことになるわけである。文や発話の最後が言いきりになっていない例は、日本語研究では「中断節」(大堀 2002)「言いさし文」(白川 2009) などと言われたものである。特に (1a) から (1d) のように、従属節がまるで主節であるかのように単独で用いられている現象は諸言語からも観察され、類型論的な立場からも「脱従属化 (insubordination)」として議論された²⁾。また連体修飾表現と被修飾の名詞句で構成される (1e) のような例は、文の最後が名詞句で締めくくることから「名詞句独立文」(新屋 2014) などとして分析されており、いずれも文に見られる形態・統語的な不完全さが注目されたものである。

従来のアプローチからして上記のような例のもっとも問題となるのは、省略されたと思われる個所が先行文で提示されているわけではない、という点である。このような表現形式は特定ジャンルと結び付くスタイルの一種とされ、文体論や談話論、テキスト分析などで周縁的に扱われてきた。

しかし日本語では、以下で紹介する字幕や吹替えを始めとした様々なテキストにおいて述語の一部または全部を省くという例が見られ (尹 2015、2016)、不完全な述語を用いることが表現の経済性を実現する戦略として定着していると考えられる。

2.2. 字幕と吹替え—省略傾向の強さ

字幕とは、母語以外の言語で提供される映像コンテンツを母語話者が理解できるように発話内容などの言語情報を訳して画面上に表示した文字列のことである。字幕は基本的に画面上に数秒間しか表示されず、例えば日本の劇場用映画の字幕の場合、「1秒4文字、台詞の長さは最大6秒、1行13文字で2行まで」のように文字数の上限が定められるなど³⁾、時間的・空間的な制約が比較的強いテキストである。従って翻訳の作業ではオリジナルの情報から取捨選択を経て情報量を減らすことになり、省略の度合は必然的に高くなる。さらに、音声会話で活用される声の大きさやイントネーションなどの準言語要素、そして笑いや唸り、せき込みといった言語音以外の声などが字幕では取り去られることになる。このために字幕は、異言語間の翻訳である上に、音声媒体から文字媒体へという、異なるモード間で行われる翻訳であるという側面も持つ⁴⁾。縮小された情報の伝達は、特徴的な形式を使うことで実現する傾向がある。いくなれば字幕の「文法」とでも呼べるものである。

一方で吹替えは、映像中の台詞を音声で伝えることを目的として翻訳を行ったテキストである。通常吹替えでは主要な登場人物の台詞だけでなく、エキストラ同士の会話やテレビからの音声など、ストーリー進行と直接関係のない背景的な台詞も翻訳の対象になる⁵⁾。字幕のように明確な字数制限が定められているわけではないが、翻訳された台詞が画面上の人物の音声であるかのような

2) Evans, Nicholas (2007) "Insubordination and Its Uses," *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, ed. by Irina Nikolaeva, 366-431, Oxford: Oxford University Press.

3) 篠原有子 (2012) 「映画字幕は視聴者の期待にどう応えるか」『通訳翻訳研究』12, 209-228.

4) Gottlieb, Henrik (1994) "Subtitling: Diagonal Translation". *Perspectives: Studies in Translatology* 2/1: 101-121.

5) 日本映像翻訳アカデミー (2011) 『はじめての映像翻訳』アルク.

演出で伝えられるため、当該の人物が台詞を発する時間内に収まる長さでなければならないというのが実質的な字数制限として働く。即ち吹替えも、字幕とは異なる形で時間的制約が存在し、それに対応するために省略が頻繁に行われることになるのである。

従来、字幕や吹替えは翻訳形態の一つとして関連研究の中で全般的な特徴や機能、手法などを分析するというアプローチが多く、情報内容の損失と関連しては、訳の過程で発生する言語的・文化的空白をどのように扱うかなどに関する考察が行われた (Gottlieb 1994、藤濤 2007)。その一方で、一つのテキストとして字幕や吹替えがもつ言語形式的な特徴はさほど注目されてこなかった。即ち、情報量を減らす必要と、視聴者に分かりやすく伝えること、相反する二つの目的を両立させるために、何を削って何を残すか、それをどのような形式でまとめあげるのか、などに関するアプローチは少なかったのである。そこで観察されるパターンや方向性が情報伝達的手段としてはどのように位置づけられるのかを分析することは、日本語における情報伝達の仕組みを考える上で重要なことである。

3. 字幕と吹替えの不完全な述語の様相

本節では英米のテレビドラマ9作品で採録した字幕と吹替えの具体例を紹介しながら、述語に現れている不完全さの種類とその形式が果たす機能を観察し、二つのテキストを対照していく。

まず字幕は文字が媒体になってはいるが登場人物の会話を模写したもので、基本的には書き言葉より話し言葉に近い特徴を示すが、代表的な話し言葉である日常会話と比べて省略の程度が高い。

- (2) 男1: おはよう やはり屋上に?
 男2: 飛び降りそうに…
 男1: 自殺?
 男2: 屋上を競技場だと
 (『ドクター・ハウス』)

(2) は字幕の一例だが、文脈や画面で提示される背景情報などがなければ非常に分かりにくいものであり、一般的な日常会話に比べると異質さが目立つ文体といえる。このことは、同じシーンの吹替え台詞と比べてみるとより明確になる。

- (3) 男1: やあ おはよう ダンを見つけた
 男2: 飛び降りる直前に
 男1: 自殺か?
 男2: 本人は競技場にいると思っていました

(3) は (2) と同一場面の吹替え台詞である。舞台となるのは病院で、2名の医師が前日に行方不明になった入院患者 (運動選手) のことを話題にしている会話である。(2) より日常会話に近い形で、文脈の手助けがないままでも (少なくとも字幕よりは) 2人の話者の間のやりとりとして分かりやすいものになっている。

吹替えの方が字幕に比べて内容が分かりやすいのは、一つ目に情報量の違いに起因する。文や発話を構成する語は、具体的な意味内容をもつ内容語と、意味内容はもたないが抽象的な文法機能を担当する機能語に区分されるが、吹替えの方が字幕より使用語彙の種類も数も多く、(2) と (3) を比べると省略の程度が異なることが分かる。例えばそれぞれの最後の台詞である (2) 「屋上を競技場だと」と (3) 「本人は競技場にいると思っていました」を比べた場合、吹替えでは明示されている主語成分の「本人は」と、述語の「(競技場に) いる」、「思っていました」が字幕では欠けている⁶⁾。

吹替えと字幕の違いをもたらし二つ目の要素は、形式の長さである。特に前節で紹介された「言い切らない表現」に近いような、文が途中で止まっているような形式が用いられている。各例の文末部分に注目すると、述語を構成する要素が省かれており、どれが省かれているかによってい

6) ただし吹替えの方では「屋上」という情報が欠けている。

くつかのパターンが見られるが、代表的なものとして「名詞止め」「動名詞止め」「助詞止め」「不完全なモダリティ」を挙げることができる。これらは共通して、特定の要素を省いたことにより何らかの文法的制約が生じることから、「不完全さ」をもつと言える。

- (4) a. 私はノースウエスタン大 ほぼ同期ね
(『プリズン・ブレイク』)
b. 清掃員が発見 (『メンタリスト』)

(4) は、日本語の典型的な文構造に照らせば、述語部分にいくつかの要素が欠けている例である。まず (4 a) は、話し手が相手と同じ大学を出ていることを伝えるという発話である。この文のように「A は B (だ)」の形で、名詞 (句) とコピーラ「だ」の組み合わせが文の最後に位置して述語の役割をする文は「名詞述語文」と呼ばれる。(4 a) は名詞述語文の構造をしているものの、下線部の「ノースウエスタン大」という名詞には「だ」(あるいはそれに相当する形式) が用いられず、文が名詞形で締めくくられているのである。「だ」が欠けたからといって意味が分かりにくいというわけではないが、名詞形で止まって丁寧さを表す形式が現れていないなど、何らかの不完全さをもつといえる⁷⁾。このような名詞述語文の形式を本稿では「名詞止め」と規定する。

また (4 b) は「発見 (した)」という形式で締めくくられている「動名詞止め」の例で、「清掃員が (～を) 発見する」といった動詞述語文の過去形と同様の意味として用いられている。サ変動詞の語幹である「発見」などの名詞は、名詞でありながら動詞のような振舞いをすることから「動詞性名詞 (以下「動名詞」)」と呼ばれる。通常は「する」を伴って動詞化するが、上記で見られるように「する」なしでも動詞のような役割を果たすことがある。

ただしその役割には制約がある。例えば「発見

ーさーれていーたーに違いないーぞ」などのように、「発見」の後に様々な形式を付け足すことによってより複雑な出来事の内容を表現することができるが、「する」が欠けた状態ではいずれも用いることができない (「*発見ーれていたに違いないぞ」)。

- (5) a. 話があるんだ ドーソン教授を?
(『アリー・my love』)
b. 検査が いいかげんなのでは?
(『ドクター・ハウス』)

さらに (5 a) のように文が助詞で締めくくられる「助詞止め」では、基本的に動詞述語文の構造をしているものの、述語に相当するものが見当たらないのが特徴である。(5 a) は「ドーソン教授を (覚えているか)」という意味で用いられているが、「覚える」という動詞そのものが存在せず、付随するはずの文法形式の「～ている」「～か」なども省かれ、それらが伝える情報も合わせて省かれたことになる。

また (5 b) は「～いいかげんなのでは (ないか) ?」に相当するものだが、推量の気持ちを表す「～のではないか」から「ないか」という一部が省かれている。「～のではないか」は、「ある判断への傾きをもつという否定疑問文の機能が固定化した形式⁸⁾」で、日本語文法では「モダリティ」という範疇に分類される表現形式である。さらにその形式の一部を省いた「～のでは」という形も慣習的に用いられることがあるが、後ろの「ないか」を削ったことにより、いくつかの文法形式の使用が制限されることになる (「*いいかげんなのではーでしようか」)。このように一部が省かれたモダリティ形式を本稿では「不完全モダリティ」と呼ぶことにする。

このように述語で特定の成分が欠けると、テンス・アスペクト・ヴォイス・モダリティといった、それ以降に続くことができる様々な文法形式

7) 「だ」と「です」は両方とも名詞述語文の体裁を整える機能語であり、「*私はノースウエスタン大だです」のように共起できないことから、本稿では同じものとして扱う。

8) 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法④』くろしお出版。

を用いることができないという制約が生じる。「だ」「する」やモダリティの一部を省略するパターンはもちろん、述語が全部省略される助詞止めのパターンではなおさらであり、その点が述語の「不完全さ」となる。

上記のようなパターンは日本語の字幕で特徴的に用いられる。一方で吹替えでも述語における不完全さの例が見られる。

- (6) a. 映画観てアイスがアメリカの伝統
(『デスパレートな妻たち』)
b. 私は2年後にノースウエスタン大を卒業
(『プリズン・ブレイク』)
c. その名は人々の口には 私にも口にする
気はない (『シャーロック』)
d. 血液検査をしくじったのかも
(『ドクター・ハウス』)

吹替えの例(6)は、順番に名詞止め、動名詞止め、助詞止め、そして不完全モダリティの例であり、それぞれ「アメリカの伝統(だ)」「卒業(した)」「人々の口には(のほらない)」「しくじったのかも(しれない)」の意である。いずれも述語の一部または全部と、付随する文法形式などが省かれた形になっていることが分かる。

このように不完全な述語は字幕と吹替え両方で見られるものの、具体的な使用様相には異なる点がある。まず字幕と吹替えは、同じ原典のテキストから翻訳されるが翻訳者が異なることが一般的で、述語における不完全さも常に対応しているわけではない。個別の場面ごとに突き合わせてみると、使用如何やその形などが異なっている例も確認できる。例えば(4a)と(6b)は同じ場面の字幕と吹替えであるが、使われた不完全述語のタイプはずれていて、字幕(4a)は名詞止め、吹替え(6b)は動名詞止めになっている⁹⁾。次節で

は、字幕と吹替え全体で見られる傾向とその意義について論じる。

4. 事象の情報とその言語化

字幕と吹替えを観察すると、吹替えの方が字幕に比べて情報量が多いことが全体的な傾向である¹⁰⁾。述語の不完全さの場合、例えば上記の例(2)(3)のように、字幕が「屋上を競技場だ」という助詞止めになっているのに比べて吹替えでは述語が保持されるなど、字幕では不完全な述語を用いていても対応する吹替えでは不完全さが緩和されることが多い。

表1は、本稿で取り上げた作品のうち不完全な述語の使用例がもっとも多い5作品で、字幕と吹替えにおける不完全な述語の4タイプの出現数の合計、そして場面当たりの出現頻度を作品別にまとめたものである。各作品において、吹替えが字幕に比べて使用例が減っている傾向が見てとれる。

吹替えで相対的に述語の不完全性が少ないということは、明示的な言語形式を通して表現される情報が字幕に比べて多いことを意味する。例えば「普通体」と「丁寧体」の使い分けなど、聞き手との親疎関係を表すのも字幕では制約が発生する。吹替えの台詞は基本的に画面上の人物同士の音声会話として伝達されるので、視聴者にとっては字幕以上に「対面コミュニケーション」であるという認識が強くなる。したがって待遇表現やモダリティなどのように話し言葉で重視されるような要素は、字幕の場合より重要度が高く、必然的に述語の不完全さも抑えられることになるものと考えられる。

さらにこの観察結果は、述語がどのような情報内容を言語化し、どのような機能を果たす形式なのかという観点から多くの点を示唆する。

情報内容をその指示内容で区分すると、まず

9) 場合によっては使用如何が逆転する例もある。例えば(6c)は述語動詞そのものが省略された助詞止めだが、該当する字幕は「誰もその名を口にしない 俺も言わない」で、字幕の方が吹替えより述語の完全性を保っている。

10) 吹替えの情報量は、本稿のデータでは文字数を基準としたときに字幕のおよそ1.5倍ほどだった。伝達媒体が音声である吹替えデータは音節数で数えるのがより適切かもしれないが、ここでは字幕との比較のため、文字起こしの際の文字数を基準としている。

表 1. 不完全な述語（合計）の用例数比較

タイトル	用例数合計 (字幕)	用例数/場面 (字幕)	用例数合計 (吹替)	用例数/場面 (吹替え)	場面数* (字幕基準)
グレイズ・アナトミー	126	0.19	101	0.15	653
シャーロック	219	0.16	104	0.08	1353
ドクター・ハウス	88	0.14	61	0.10	638
デスパレートな妻たち	73	0.13	58	0.10	569
プリズン・ブレイク	66	0.12	43	0.08	539

*一つの字幕が表示され、次の字幕に変わるまでを「場面」、一つの作品における場面の数を「場面数」とする。

「主体 (entity)」と「事象 (event)」に分けることができる。基本的に主体は人間や生物、事物などの「モノ」として括られる対象で、そのあり方自体は時間の流れと結びついているわけではない。それらは典型的には名詞の形をとり、文の中では主語や目的語等などとして機能する。一方で事象とは、動作や変化、状態など、時間軸の上に展開することを前提とする抽象的な「出来事」であり、動詞（または形容詞）の形で出来事の内容を述べる述語として実現するのが典型的で、日本語では述語に様々な活用語尾をつけることで出来事における抽象的な関係の情報が示される¹¹⁾。

そしてこれらの情報を言語化した形式は、情報伝達の上でどのような機能を果たすかで「命題 (proposition)」と「モダリティ」に二分することができる。命題とは、事象の具体的な内容と参与者（主体）の関わり方などを表すもので、モダリティは命題の内容に対して話し手がどのような捉

え方をするのかという心的態度を表すものである（益岡 1991）。例えば、「その件は先日の会議で議論されていたかもしれない」という文では、「その件は先日の会議で議論されていた」という事柄に対して、話し手が「その命題内容が事実である可能性がある」と考えていることを「かもしれない」というモダリティ形式で表しているということになる。

このような前提に立つと、日本語の文における述語は、命題の核心的な要素である出来事の具体的・抽象的な情報とそれを捉える話し手の心的態度を言語化した形式として理解することができる。そしてその述語を不完全な形にする戦略は、音声媒体より文字媒体で多く取り入れられていることになる。

一方で、字幕と吹替えにおける不完全述語の使用様相の違いのうち、助詞止めと名詞止めの使用に見られる違いに注目されたい。

表 2. 不完全な述語（名詞止め/助詞止め）の用例数比較

タイトル	助詞止め (字幕)	助詞止め (吹替)	名詞止め (字幕)	名詞止め (吹替)	2形式合計 (字幕)	2形式合計 (吹替)
グレイズ・アナトミー	43	9	65	73	108	82
シャーロック	120	22	49	69	169	91
ドクター・ハウス	40	13	20	30	60	43
デスパレートな妻たち	19	3	46	47	65	50
プリズン・ブレイク	42	11	17	22	59	33

11) 日本語の場合、モダリティの他に、出来事が時間軸のどの時点で起きたかを示すテンス、時間軸上の展開の仕方を問題にするアスペクト、出来事に対する視点の違いを表すヴォイス、肯定か否定かを示す肯否極性などが含まれる。

表2は、表1の5作品における名詞止めと助詞止めの項目を記したものである。吹替えのデータで各作品における不完全述語の使用例は字幕より減っていて、助詞止めの使用例は減少している一方、名詞止めは逆に増えるという傾向が現れている。

助詞止めと名詞止めの2項目を合わせた数は、全体的な傾向と同じく吹替えの方が少ない。特に助詞止めの下げ幅が大きく、全ての作品で半分以下になっていることが確認できる。すでに述べた通り、実際の例の分布も、字幕で助詞止めを使っている場合でも吹替えでは動詞述語が示されていることが多い。その一方で名詞止めの使用例は、各作品で増えている。全体的な傾向同様、二つの項目とも減るならともかく、名詞止めだけが吹替えの方で一貫して増えることに関しては説明が必要になる。

このことは、情報種類の違いで説明することができる。助詞止めの場合は述語において動詞自体が省かれているため、動詞が示す出来事の具体的な情報内容が提示されない。一方で名詞止めは「だ」の省略により名詞述語が一定の不完全さをもつようになるが、情報内容の損失は少ないという違いがあった。不完全な述語の各パターンを、情報内容の損失が大きい順から少ない順に並べると以下ようになる。

- (7) 助詞止め > 動名詞止め > 名詞止め > 不完全モダリティ

吹替えにおいて、情報内容の損失がより多い助詞止めの使用は抑えられる一方で、相対的に損失が少ない名詞止めの使用が増えるというのは、不完全な述語の使用は吹替えにおいても戦略になっているものの、情報量の低下はできるだけ避けたいという方向性が働いていることを意味する。文字媒体のテキストに比べて音声媒体のテキストで述語の不完全さが抑えられるというのは他でも見られる傾向であるが(尹2017b)、吹替えに存在する時間的制約に対して何らかの対応策は必要であることから、相対的に名詞止めの使用が増えると考えられる。

5. まとめと今後の課題

以上、日本語に見られる不完全な述語の形式とその機能について、字幕と吹替えのデータから分析した。日本語の様々なテキストでは、情報伝達の経済性が重視されるようなテキストで不完全な述語が効果的な戦略として用いられている。そして不完全な述語の使用は吹替えの方では字幕より減っており、音声媒体で情報を伝達する場合は述語の実質的な意味内容を保持するという傾向が示された。

情報内容をどのように言語化し、どのような構造として構成するかは、意味と形式のマッチングの問題として多くの関心が寄せられてきたが、どのような種類の情報が言語化において優先されるのかはさほど注目されていない。日本語においては本稿で指摘した不完全な述語以外にも、「(対象を) どうするのか」に関する情報が示されない表現形式があるが、文法体系で多くの共通点をもつ韓国語の場合は違う様相を示すことが知られている。例えば韓国語の場合は、事象に関わる情報である述語形式はなるべく完全な形を保持しようとする傾向が強く、省略戦略としてより目立つのは事象の参与者に関わる情報を省くことである(尹2016)。これは個別言語によって言語化される情報が異なる優先順位を取っていることを示唆するものであり、日本語における分析をさらに深化し、その結果を他言語との対照分析に広げることが今後の重要な課題であると考えられる。

参考文献

- Evans, Nicholas & Levinson, Stephen C. (2009) "The myth of language universals: Language diversity and its importance for cognitive science", *Behavioral and Brain Sciences* 32, 429-492.
- Gottlieb, Henrik (1994) "Subtitling: Diagonal Translation". *Perspectives: Studies in Translatology* 2/1: 101-121.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. (2003) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤濤文子 (2007) 『翻訳行為と異文化コミュニケーション－機能主義的翻訳理論の諸相』 松籟社.
- 石黒圭・橋本行洋 (編) (2014) 『話し言葉と書き言葉

- の接点』ひつじ書房.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法-改訂版-』くろしお出版.
- Narrog, Heiko (2016) "Insubordination in Japanese Diachronically," *Insubordination*, ed. by Nicholas Evans and Honoré Watanabe, 247-281, John Benjamins, Amsterdam.
- 生越直樹 (2002) 「日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方-「きれいな花!」タイプの文を中心に-」『シリーズ言語科学4 対照言語学』, 東京大学出版会, 75-98.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京大学出版会.
- 大堀壽夫 (2005) 「日本語の文法化研究にあたって-概観と理論的課題-」, 『日本語の研究』1(3), 1-17.
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版.
- 新屋映子 (2014) 『日本語の名詞志向性の研究』ひつじ書房.
- 尹盛熙 (2016) 「日本語の翻訳字幕における省略・縮約の実現-韓国語との対照分析」, 『社会言語科学』18巻2号, 社会言語科学会, 19-36.
- 尹盛熙 (2017 a) 「일본어와 한국어의 명사연결구성 -헤드라인에 나타난 ‘주체’와‘사건’에 대하여-(日本語と韓国語の名詞連結構成-見出しにおける「主体」と「事件」について-)」『日本學報』第112輯, 日本学会, 45-67.
- 尹盛熙 (2017 b) 「日本語の述語における機能語の省略について」『社会言語科学会第39回大会発表論文集』, 98-101.

用例出典

- ・日本で発売された英米のテレビドラマのDVD (タイトル順)
- 『アリー my love (1)』(2001), 『グレイズ・アナトミー (2)』(2006), 『シャーロック (1)』(2012), 『デスパレートな妻たち (3)』(2008), 『24 (1)』(2003), 『ドクター・ハウス (1)』(2009), 『プリズン・ブレイク (1)』(2006), 『メンタリスト (1)』(2010), 『ウォーキング・デッド (8)』(2019)